

# 日風堂

〈高知県立歴史民俗資料館〉

第2号 1991年12月1日

## 若き日の私と考古学

高松短期大学教授 岡本健児

福岡中学の三年の時、博多湾に突き出た海ノ中道で土器片を拾ったことで考古学を知った。この土器片は最近の海ノ中道の発掘で製塩土器であることが判明した。考古学が病みつきになり、入手した『考古学雑誌』に国学院大学教授の論文があり、これが縁で憧れの国学院大学に入学した。

教職を得て窪川農業学校の教諭となったが、半年足らずで召集を受けた。直前まで今、歴史館に陳列してある松葉川村西ノ川口出土の銅矛の調査をしていた。シンガポール、マレー、タイ、



宿毛貝塚の発掘記念写真(昭24. 8. 8)  
人骨の前に岡本、その横に故安岡源一、廣田典夫の両氏、背後には若き日の上岡正五郎、橋田庫欣両氏もみえる。

ビルマと移動し、最初に兵火を交えたのは雲南であった。戦火の間、垣間見た雲南山岳民族の生活は弥生人のそれを彷彿させるものがあった。南ビルマの平原部に撤退した頃から食料調達のため軍服をビルマ服に替え、牛車を操っての日々であった。村に入ると大きな爆撃の穴がある。この穴から石器や土器片を時に拾った。私の背のうは、それらで膨らんだ。終戦後一年に近い内地送還の日、持ち帰ってはならぬという命令で捕虜収容所の一角にそれらを埋めてしまった。

戦後の高知県における考古学の調査は、昭和二四年の宿毛貝塚の発掘を以て嚆矢とする。それも県教委によるもので、高知県における行政発掘の第一号である。発掘は夏休み中の三日間であったが、縄文人骨も出土し大成果であった。県教委の好意で人夫として参加した私は人骨出土の時点から、その経験の多いことから発掘全体を指揮することになった。そして報告書の執筆も担当せざるを得なくなった。この報告書『宿毛貝塚』は戦後行政機関が刊

行したもので、西日本で最初のものであることは余り知られていない。

宿毛貝塚発掘の帰途、中村の上岡正五郎先生宅へ寄り所蔵の考古遺物を拝見させていただいた。なかに昭和一〇年の四万十川改修工事で、当時の具同村入田字石槌から発掘された縄文晩期の凸帯文土器と初期弥生土器が一つの木箱に保存されているのを見て一驚した。まさか、このような遺物が四国の、それも西南部の四万十川流域に存するとは夢にだに想像し得なかったからである。そして、その翌夏、私は入田の例の土器出土地付近を探索し始めたが、上岡先生のご令息宏輔君(当時小学校の六年生)が事前に良好な両土器の混在する包含層を突き止めていられたのには、これ又驚きの声を発せざるを得なかった。これ以後、県下いくつかの発掘を私は行うのだが、案外そのきっかけを作るのは小・中学生であることを特に申しあげておきたい。

丁度、その頃日本考古学協会内で、わが国における農耕文化起原に関する特別委員会が生まれ、国の科学研究費で全国のこの方面の解明につながる七遺跡の発掘調査が実施されることになった。入田遺跡も福岡県板付遺跡とともに七遺跡のなかに入れられ、私が発掘担当者選ばれた。発掘の成果は上々であった。

# 土佐を掘る

## 第一回発掘された遺跡展

一九八九・一九九〇年度の発掘調査から

(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター

調査第二係長 森田尚宏

高知県は、四国山地と黒潮、山と海の幸多き恵みを受けた自然が残されており、そこには土佐に生きた人々の歴史が刻み込まれている。この緑豊かな県土にも開発の波が押し寄せており、自然の姿も年を追うごとに変わっている。

一九八〇〜一九八五年度にかけて実施された高知空港拡張整備事業に伴う田村遺跡群の発掘調査は高知県における大規模開発による発掘調査の始まりであり、これ以後、国道や河川改修、宅地造成、建築工事等に伴う緊急調査が急増し、その規模も拡大している。

発掘調査の結果、今までにない新資料の発見があり、高知県の歴史、ひいては日本の歴史をも書きかえるような新しい事実も判明している。これらの成果は、発掘調査終了時に現地説明会を開き、公開するとともに、整理作業を終了したものは報告書にまとめ刊行されている。しかし、出土遺物等は収蔵されると一般の方々の目に触れることが少なく、調査の成果を公開する場も少ないため、今回、歴史民俗資料館

の企画展として一九八九・一九九〇年度の発掘調査を中心とした成果を展示することとなった。

発掘件数は、一九八九年度に二十七件、一九九〇年度には三十九件と急増しており、南国市を中心とした高知平野での調査が多いが、中村市や他の市町村でも調査件数は増加している。縄文時代では、十川駄場崎遺跡と松ノ木



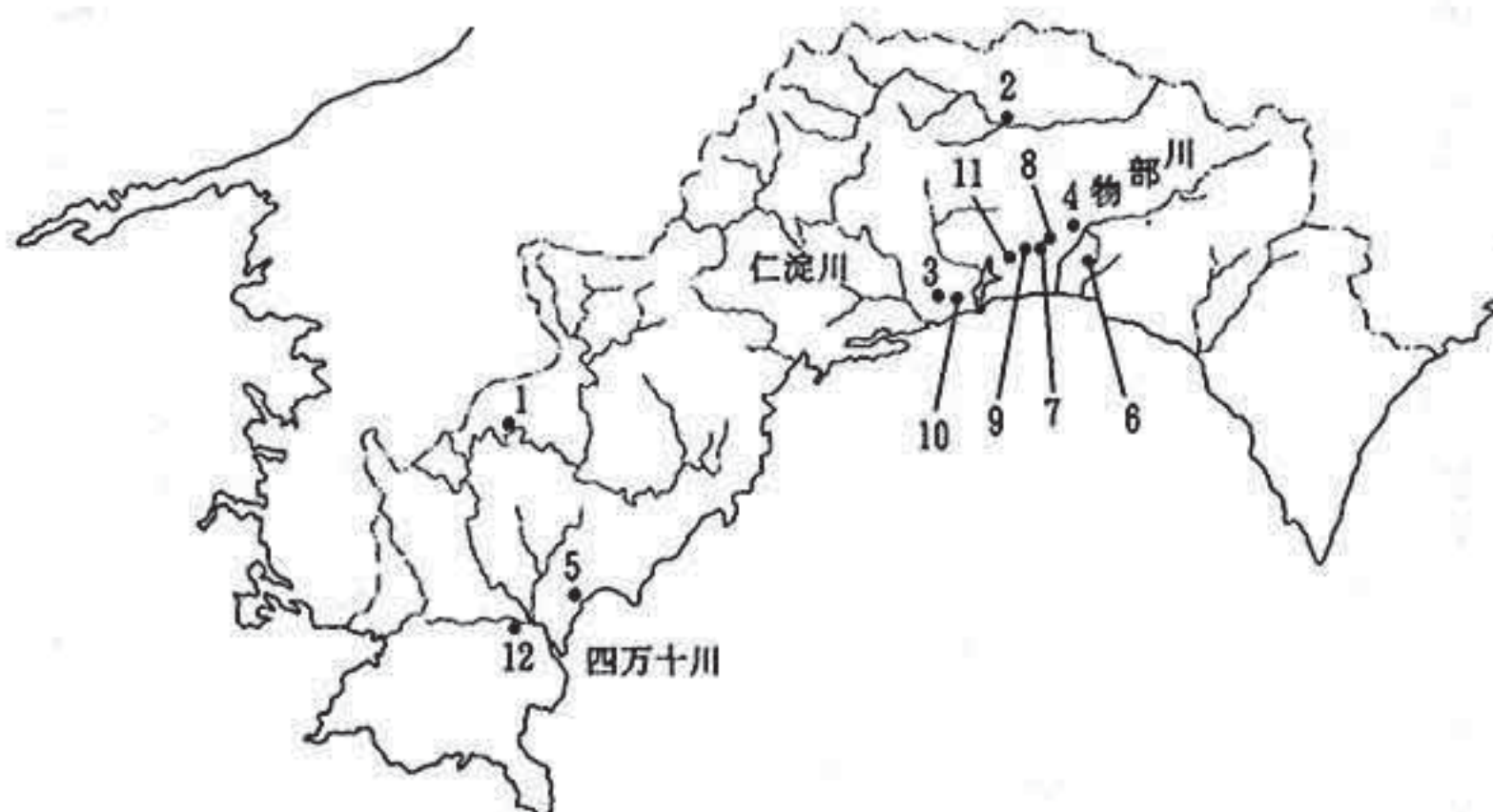
十川駄場崎遺跡 全景



松ノ木遺跡出土の縄文土器

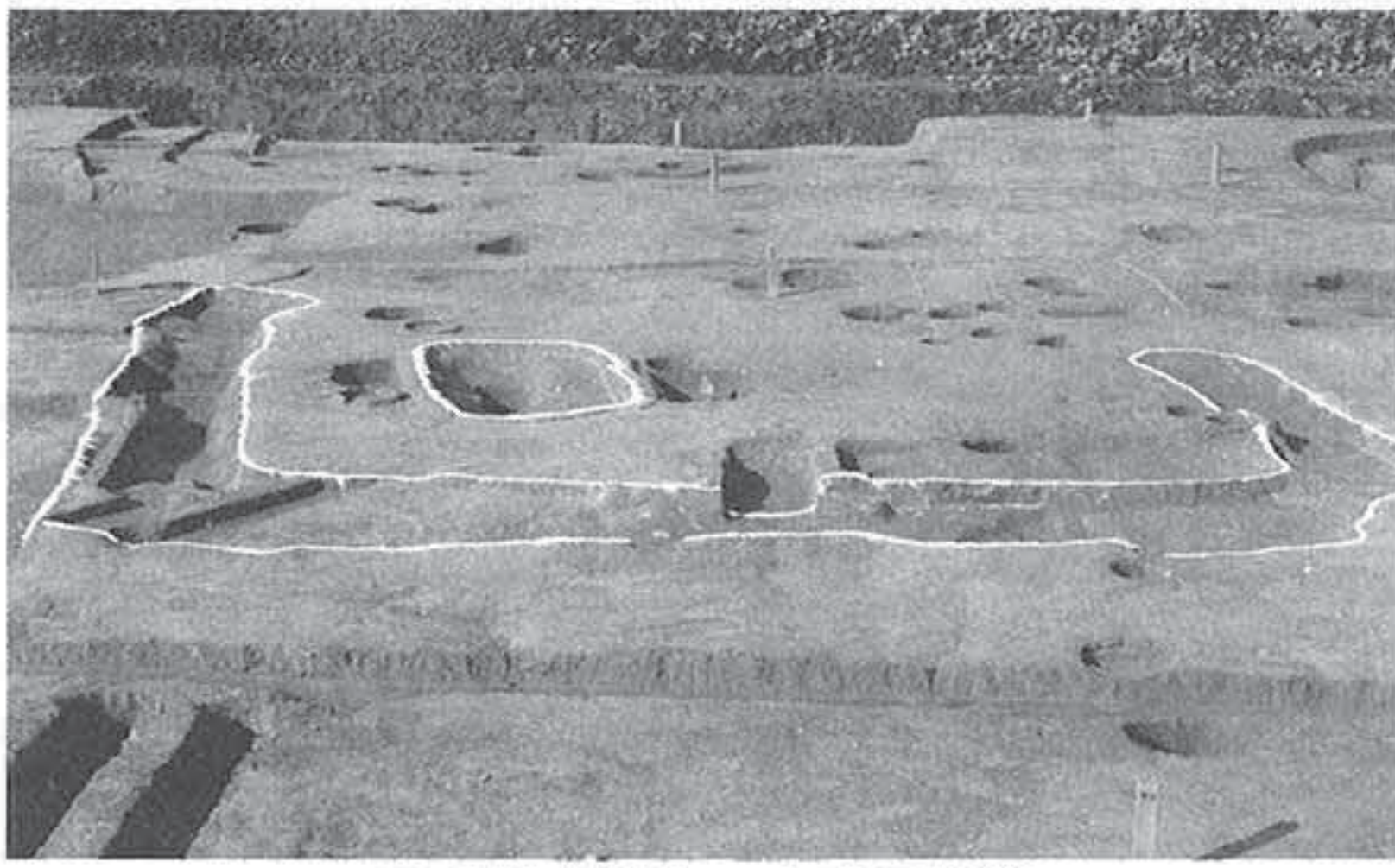
遺跡が注目される。十川駄場崎遺跡では一九八八年度の調査において最古の縄文土器の一つとされる豆粒文土器と尖頭器が出土しており、一九九〇年度の調査により草創期包含層の下面が確認された。松ノ木遺跡では、縄文時代後期前半の土器が多量に出土しており、これまで不明であった県中央部、吉野川流域の縄文時代の姿が明らかになるとともに西日本における後期前半の土器を知るうえで不可欠の資料を得ることができた。

弥生時代では、後期の西分増井遺跡、ひびのきサウジ遺跡が調査された。西分増井遺跡では竪穴住居跡が十七棟検出されているが、注目されるのは古墳時代初頭の方形周溝墓であり、県内初検出である。これまで高知県ではみら



1989~1990年度の発掘調査

| 番号 | 遺跡名       | 所在地   | 時代          |
|----|-----------|-------|-------------|
| 1  | 十川駄場崎遺跡   | 十和村   | 縄文時代 草創期~中期 |
| 2  | 松ノ木遺跡     | 本山町   | " 後期        |
| 3  | 西分増井遺跡    | 春野町   | 弥生時代~古墳時代   |
| 4  | ひびのきサウジ遺跡 | 土佐山田町 | " "・平安時代    |
| 5  | 早咲遺跡      | 大方町   | 古墳時代 後期     |
| 6  | 大谷古墳      | 野市町   | " "         |
| 7  | 土佐国府跡     | 南国市   | 奈良・平安時代     |
| 8  | 比江廃寺跡     | "     | 白鳳・奈良時代     |
| 9  | 土佐国分僧寺跡   | "     | 奈良・平安時代     |
| 10 | 芳原城跡      | 春野町   | 戦国時代        |
| 11 | 岡豊城跡      | 南国市   | "           |
| 12 | 具同中山遺跡群   | 中村市   | 弥生時代~近世     |



西分増井遺跡 方形周溝墓

れなかつた墓制であり、弥生時代から古墳時代の墓制を知る上で重要である。古墳時代では横穴式石室をもつ大谷古墳の調査が行われた。石室は玄室のみ残されており、羨道及び墳丘は壊されていた。敷石の床面上からは、金環、銀環、水晶の切子玉、勾玉、ガラス小玉、完形の須恵器、馬具等が出土している。早咲遺跡では、古墳時代の集落跡が検出され、竪穴住居跡から手捏土器、土製模造鏡、土製玉等の祭祀遺物が出土している。

古代の調査は、土佐国府跡、比江廃寺跡、土佐国分僧寺跡で行われており、土佐国府跡では周辺官衙の建物群が検

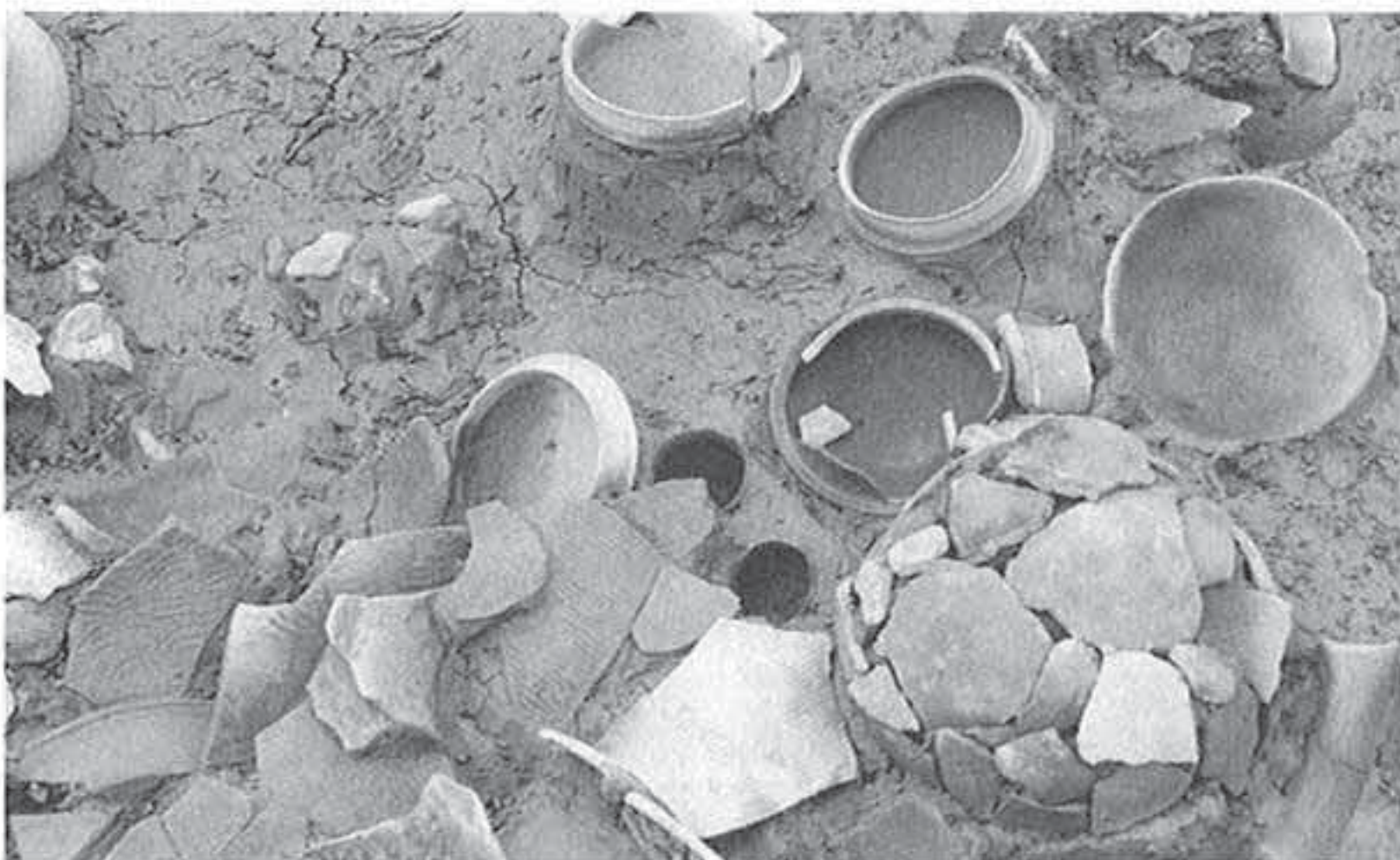


大谷古墳 石室

出され、比江廃寺跡では瓦溜めと多量の瓦類が出土し、土佐国分僧寺跡では現金堂の北側に僧房ではないかとみられる掘立柱建物跡が検出されている。

中世では山城の調査が行われた。芳原城跡は詰を中心とし、周囲に二ノ段、三ノ段が廻っており、詰、二ノ段から掘立柱建物跡が発見され、小形の銅椀、硯等が出土し、注目されている。岡豊城跡の調査は四ノ段を対象として実施され、虎口北側の方形郭では土塁内側の石垣と礎石が検出され、染付を中心とする輸入陶磁器、土師質土器等の他に土製犬、鎧の飾金具、鉄砲玉、埴埴の引手金具が出土し、当時の生活の一端を知ることができた。

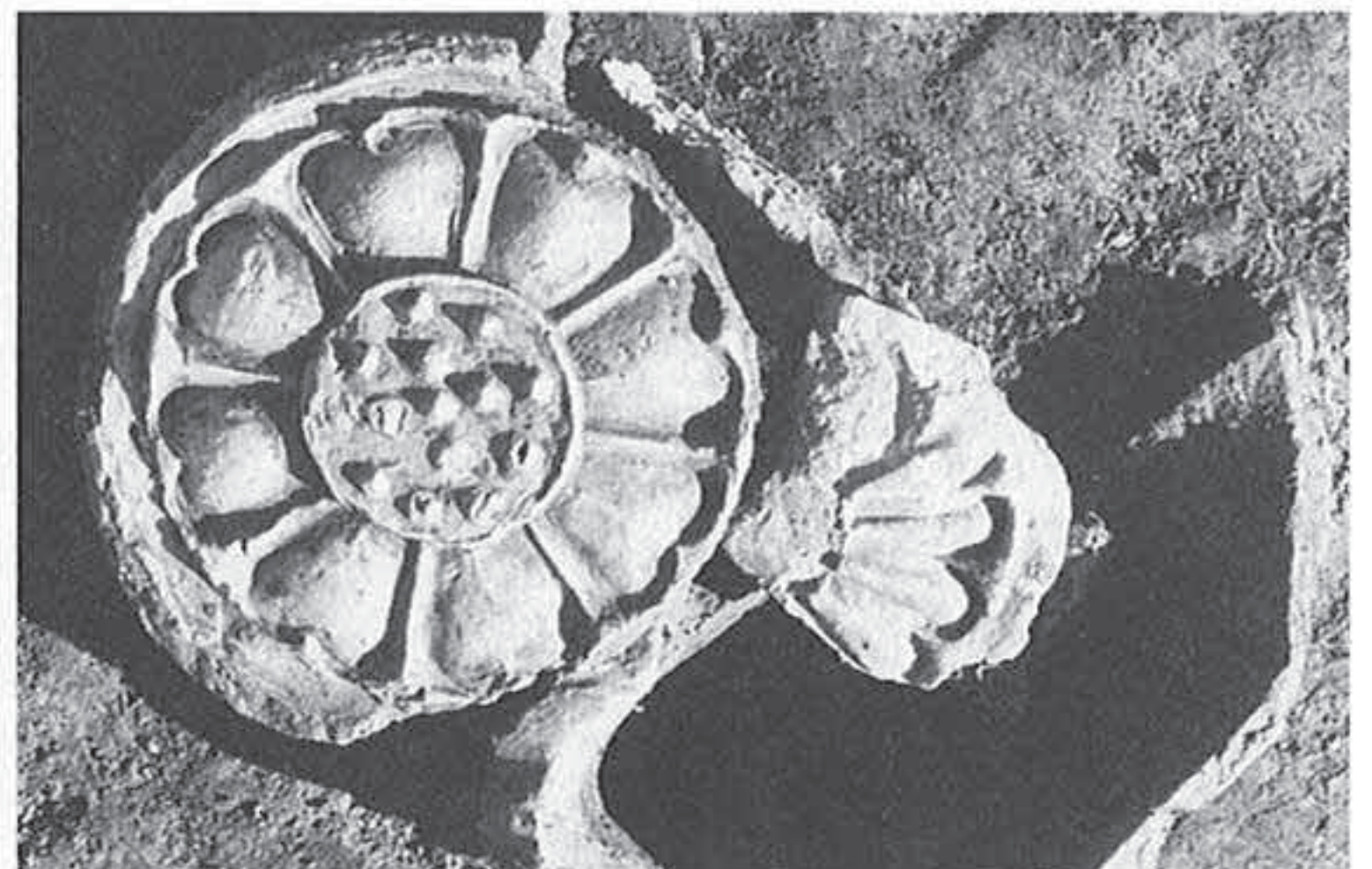
具同中山遺跡群は中筋川の河川敷に立地する遺跡であり、弥生時代から近世におよぶ祭祀と集落の一大複合遺跡である。弥生時代及び古墳時代では祭祀跡が数多く発見されており、特に古墳時代の祭祀は規模が大きく、多量の須恵器、土師器、土製・石製模造品が出土している。古代になると集落跡が主となり、官衙の役人に関する石帯などもみられる。中世においても引続き集落は存在するが、割石を組んだ中世墓や泥塔が発見されており、墓域としても使用されていたようである。以後、近世になると水田跡が検出されており、集落は途絶えるようである。



具同中山遺跡群 古墳時代祭祀跡



岡豊城跡 四ノ段北部郭全景



比江廃寺跡 出土軒丸瓦

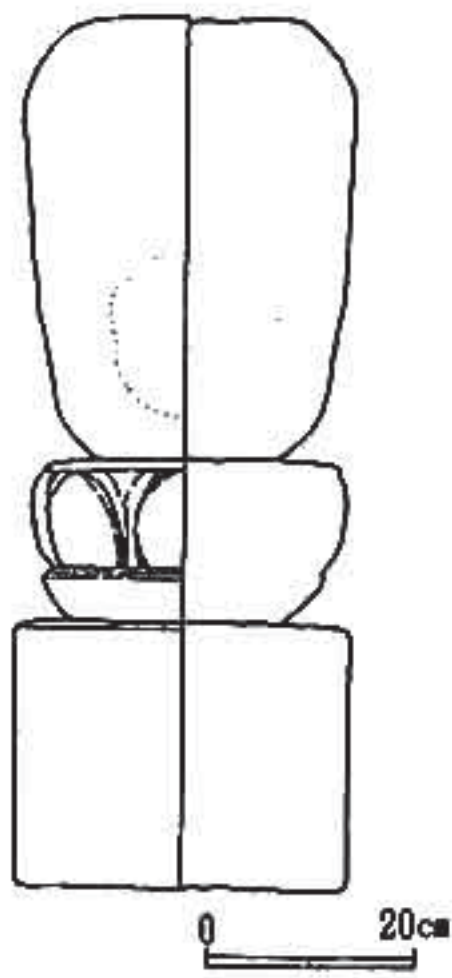
## 資料紹介

### 土佐の無縫塔(一) 伝源希義の無縫塔

無縫塔は、石造塔婆の一種で塔身が卵形であることから卵塔とも呼称されている。この塔形は、日本で発生したものではなく中国に起源をもち、鎌倉時代に宋の仏教文化とともに無縫塔形式が伝わったものである。

この塔は、もとは禅宗系で用いられた塔形で、開山塔・墓塔として用いられた。南北朝時代末には浄土系で用いられ、近世には各宗派の墓塔として造立された。

源希義は源頼朝の弟で平家により土佐国介良庄(現高知市介良)に流され、年越山(現南国市)で敗死している。希義の死骸は、介良庄の住呂琳猷が庄内の埴田郷(現高知市介良付近)に葬り、墓所を営んだことが『吾妻鏡』文治元年(一一八五)の条にみえている。



伝源希義無縫塔



伝源希義無縫塔

伝源希義の無縫塔は、現高知市介良の西養寺跡に建っている。この無縫塔は、幅三二cm、高さ二五・五cmの台石の上に置かれ、請花は最大幅三・一cm、高さ一五cmで八葉の蓮弁を刻している。塔身の高さは四四cmで、石質は花崗岩である。塔身には、月輪を刻したと思われる彫りが観察できるが明確でない。無縫塔には、単制と複制があるが、この伝源希義の塔は単制の無縫塔で単制の塔は上限が一五世紀から一六世紀であると考えられている。かかる状況よりこの塔は、ほぼこの時期の所産であると考えられ、本塔をもって希義の死の直後に造立された墓塔として位置づけることは、時期的に大きなずれがあることになる。

(岡本桂典)

### 蓑の話

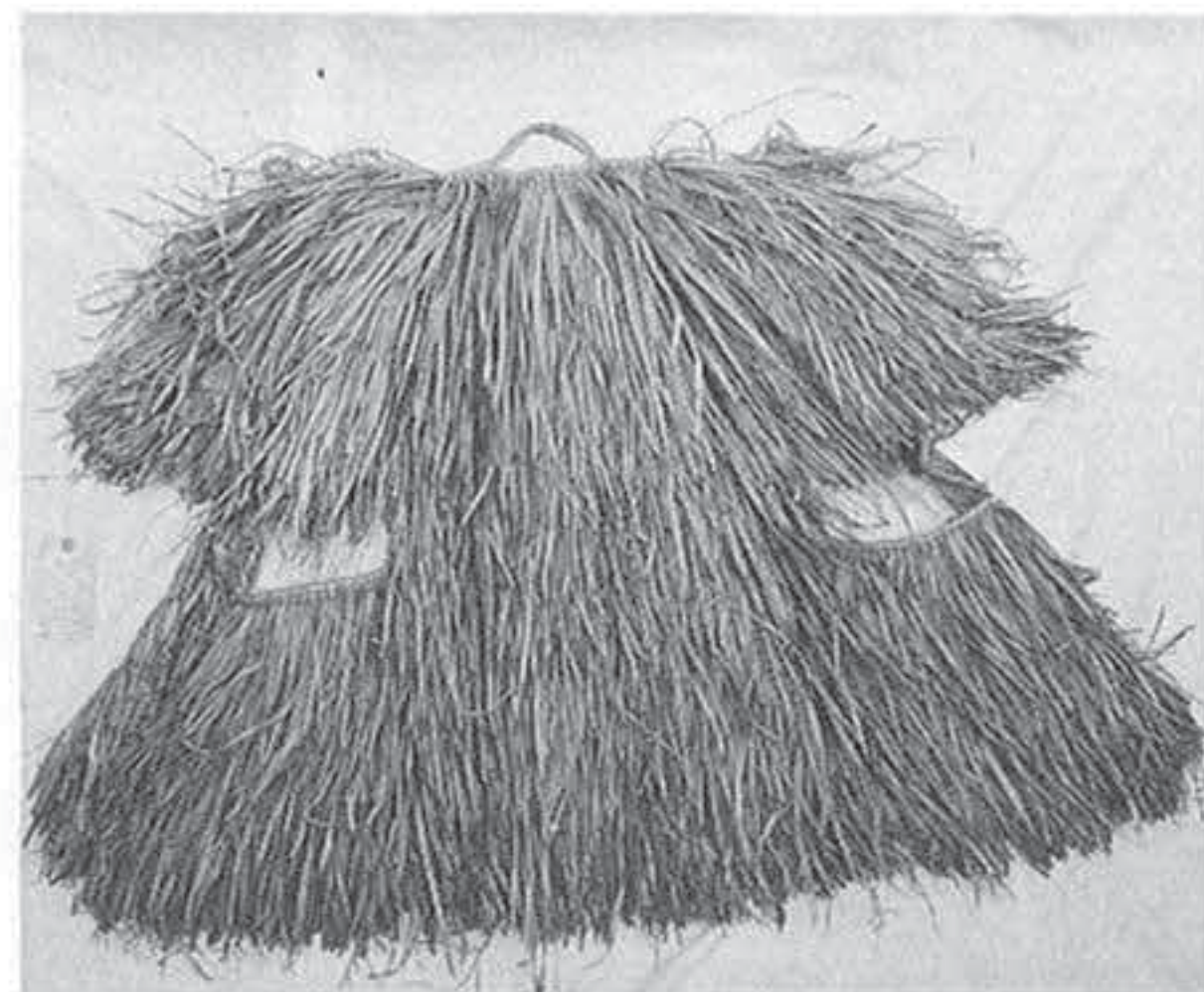
蓑は雨や雪、日射などから身体や着物を守るといふ役目を果たし、雨具や仕事着、旅装束として着用されてきた。水を通しにくく、それでいて風通しがよい蓑には、生活の知恵がよくあらわれている。民俗展示室の企画展示コーナーで、今回取り上げるのは、この蓑である。

ひとくちに蓑といっても、種類や材料はさまざまである。今回は背蓑と胴蓑を展示している。蓑の材料は、稲藁やスゲ、シユロなどの植物の葉や皮である。身の回りの植物を使った蓑の歴史は古く、絵画などにも描かれている。例えば一二世紀頃の成立の『信貴山縁起』では、旅する尼公の従者が蓑を着ているし、さらに時代を遡ると縄文時代の愛媛県上黒岩岩陰遺跡の、石に刻まれた女性像は腰蓑をつけている。

その反面、植物製であるために、石製や金属製のものなどは違って蓑は腐りやすい。また庶民の暮らしの道具は残りにくく、蓑もその一つである。現在では蓑の作り手も、蓑を着る人も少なくなり、作り方等の技術をはじめ、蓑に関する情報が失われつつある。

蓑を収集することや、蓑に関する聞き取り調査が可能なのは、今しばらくの間ということかもしれない。だが、そのことにどんな意味を見出すのかは、調査者自身への問いとなる。

また蓑の、身体を包み隠すという機能は、儀礼や習俗、昔話などにおいて、



スゲ製の蓑 (吾川郡吾川村北)

蓑を着る者がひとの目から隠されたり、見えない別の世界の存在として、蓑を着る者を畏敬視することにもつながっているようである。そうした蓑に対する心意が失われていくことは、蓑作り等の技術が失われていくことと、時期を同じくするのだろうか。

蓑の前にたたずめば、見えない別の世界に入りこみ、うずまく問いの答えをさがす旅に出ることになるかもしれない。

(河野淳子)

# 考古学の視角

## 戦国考古学

岡本 桂典

考古学では、かつて先史・原史・有史（歴史）という三時代区分法が用いられていた（一部で現在も用いられているところもある）。ただ、この三時代区分は、文献（文字）の存否をメルクマールとした区分で、その研究対象領域は、一般に文献の存在しない先史時代と文献の僅少な原史時代が中心で、歴史時代は、ごく一部が研究の対象となっていた。

この三時代区分法は先に述べたように文献の存否をもとにしたもので、考古学的方法論に立脚したものではない。この事について角田文衛氏は、「文献の有無に拠る時代区分は、瞭に文献学者のものであり、考古学者の関与しえぬ所である」（『古代学序説』昭和二九年）と主張している。

考古学の定義については、西欧流の科学としての考古学を日本に導入し、多くの業績を残された濱田耕作氏は、「考古学は、過去人類の物質的遺物（に據り人類の過去）を研究するの学なり」（『通論考古学』大正一一年）と端的に定義されている。

さて、「過去の人類の物質的遺物を研究するの学」である考古学の対象となる時間幅は、「人類が地球上に現れてから、現代までの全期間」（江上波夫『考古学ゼミナール』昭和五一年）である。しかし、日本の考古学は第二次世界大戦後に確認された先土器時代（旧石器時代）、縄文時代、弥生時代、古墳時代が主流であった。著名な考古学者が執筆した文献には、古墳時代をもって終わっているものもあり、考古学に時間的幅をもたせたのも考古学研究者自身であったことも拭えない事実なのである。

現在、日本の考古学は行政発掘が主流となり、古墳時代以降の研究も顕著になってきている。それは、考古学の定義からすれば当然のことなのである。古墳時代以降の考古学は、現在「歴史考古学」と一般に呼称されている。本来、歴史とは一般的には人類社会の過去における変遷と興亡のありさまを示す語句である。その語源は、historia（探求）というギリシャ語に由来するもので過去のありさまを探求する人間

の作業であることを意味している。

かかる一般的意味からすると歴史は文字出現以降を限定するものではなく、人類が地球上に現われた時を起点におくものである。しかし、日本の考古学では、古墳時代以降の「古代考古学」「古典考古学」「中世考古学」「近世考古学」「近代考古学」などを総括する意味で「歴史考古学」という用語を伝統的に慣用語として用いているのが現状である。この用語は、多くの問題点を残しているものの、現在この用語に変わるものがなく、慣用語として用いられる分には問題はないと考えられる。なお、近年では現代史と考古学を位置づける方法もなされ、「戦跡考古学」（当真嗣一「戦跡考古学のすすめ」『南島考古だより』三〇 昭和六二年）の提唱もなされている。

さて、戦国考古学とは一般には聞きなれない用語であろう。この用語を用いられたのは、坂詰秀一氏で「戦国考古学の成果」（『歴史と人物』一一六 昭和五六年）であった。戦国考古学とは、中世考古学の一分野で「日本の戦国時代の物質的資料の研究を通して明らかにする考古学の一分野であり、その年代的な幅は、ほぼ一五世紀の中頃より一六世紀にかけてである。」（坂詰秀一「戦国考古学とはなにか」『歴史と人物』一四一 昭和五八年）としてい

る。

戦国考古学の対象となる資料は、戦い・信仰・生活など多岐にわたっているが、その象徴となるのはやはり戦いの拠点となる城館跡であろう。

戦国時代の研究は、従前は文献史学の立場より究明され、その歴史像を我々に映しだしてきた。しかし近年、戦国考古学の成果が、従来の文献史学により通説となっていた実像を書きかえるというできごとがあった。

それは、元龜二年（一五七一）の織田信長による比叡山焼き討ちという宗教政策上の事件である。この歴史上著名な焼き討ちは、信長の性格論を論じる際にも取り上げられる事件で、堂舎をことごとく灰燼に帰したことで知られている。しかし、滋賀県教育委員会が行った三塔各所の発掘調査の結果は、元龜頃には、すでに多くの堂宇がなく根本中堂と大講堂の焼失のみが確認され、信長の攻撃は、延暦寺中枢部の叡山の山下の坂本であったことが明らかにされている。

このように史実と発掘調査の結果との食い違いを示す例はまだ少ないが、戦国史研究における考古学の方法論が戦国史の再検討に有用であることを示し、戦国史の実像を新たな方向に導いているといっても過言ではない。

## 間宮尚子著『今井貞吉』

昨秋、間宮尚子氏の労作『今井貞吉』が高知市民図書館から出版された。

今井貞吉（一八三一―一九〇三）は、幼少時より博物趣味があり、二八歳の時ガラス製造に関する建議が吉田東洋の目にとまり、抜擢されて長崎・薩摩に赴く。（この時の日記『暦嶋史』が本書で紹介されており、使命感に燃えた青年貞吉の旅の様子と薩摩での情報収集状況が、筆者の解説を交えて克明に活写されている。）

その後、貞吉は、堺事件監察吏・開成館大坂商会官吏・共立社執事・育児院々長・海南協同会惣代・県会議員等を歴任し、明治二十一年（一八八八）に至って『古泉大全』全三八巻を刊行した。同書は、和漢の古銭を時代別に分類して考証を加えた大著で、彼の業績の第一に挙げられるものである。

間宮氏は、本書のあと書きで次のように感想を述べられている。

（上略）『土佐藩の山村構造―三谷家文書考究―』を高知市民図書館から上梓したのは一九七八年だから、一二年も前になる。幕末維新期の高知県農村の活発な動向に魅了されて

いた私は、三谷助之進が共立社の提唱する製茶業に参加したという一枚の文書に興味をもった。（中略）

共立社を調べていくうちに指導者今井貞吉を知った。風山今井貞吉を知る人は少ないと思う。（中略）

共立社を研究しているうちに立志社に至った。そして民権運動をさせた貞吉像を浮び上がらせたというおもいが強い。（下略）

氏の御尽力によって、今井貞吉の生涯が克明に披歴された。幕末に青春をおくり、三八歳にして明治という時代を迎えた一人の知識人にとって、「民権」とは何であったのか―という問いに対する一つの解答が、本書に用意されているように思う。

貞吉は、政治に身を投ずるタイプの人間ではなく、自分の好む古銭学にその晩年を捧げた。このような民権運動に対するかかわり方は、民権運動研究の上では意外と看過されたり、逆に過大評価されたりすることが少なくない。本書は、このことに対しても注意を促してくれているように思う。

（下村公彦）

## 歴史散歩

### 岡豊八幡宮

### 第二回

〈南国市岡豊町八幡〉

領石、奈路、田井方面行きバス学校分岐（歴史民俗資料館入口）徒歩十五分  
（森本満子）

高知県立歴史民俗資料館から国道三二号線をへだてた北側の山頂に位置している。麓の鳥居から鬱蒼と木が茂るならかな坂道を登っていくと途中で石段にかかる。山の中腹あたりからは歴史民俗資料館が南の方に同じくらいの高さに見え、最後の急な石段を登りきると社殿が見えてくる。

別宮八幡宮ともいい、鎌倉時代の創建と伝えられている。長宗我部氏代々の厚い信仰に支えられ発展。国親、元親の時代には谷氏が神職をつとめ、永祿の頃（一五五八―一五七〇年）、谷左近が長宗我部氏に仕えて武士となり、社領五百石を領したという。谷家からは江戸時代には儒学者として有名な谷泰山を輩出している。元親の信仰は特に厚く、出陣に際し、百足蝶蜂漆絵椀（天正四（一五七六）年銘あり、歴史民俗資料館に展示中）に酒をみだし、飲み干して戦勝を祈ったという。他に社宝には元親が奉納した、鞍、太鼓、三十六歌仙画像などがある。



岡豊八幡宮 本殿

# ニュース

## 企画展示室から

### 「歴史と美術 土佐名品展」

近世土佐で活躍した画人、中山高陽、松村蘭台、徳弘董斎、河田小龍を中心に日本画と山内容堂、武市瑞山等の書を展示。日本画は花鳥、山水、人物と幅広い題材を扱ったものを出品。専門の絵師、書家というよりは歴史上有名な人物が作品製作に携わったことがよく理解できる企画となった。

期日：平成三年九月一四日

平成三年一〇月二〇日

### 「近世 土佐文人画展」

一八〇一―一九世紀に土佐で活躍した文人、またその人々に直接、間接的に影響を及ぼした、中央で活躍した文人たちの作品をあわせて紹介した。日本における南画の創始者、祇園南海。南海に引き続いて南画の大成者となった池大雅、花鳥画に新様式を拓いた沈南蘋、江戸南画の祖となった谷文晁などの優れた作品とその人々に影響を受け、多方面に優れた才能を発揮した県内の文人たちの足跡を絵画、文字資料からたどる企画となっている。

期日：平成三年一一月一日

平成三年一二月一五日



▷ 「歴史と美術 土佐名品展」

◁ 「近世 土佐文人画展」



## 「歴史館日録」

| 月日           | 出来事                          |
|--------------|------------------------------|
| 九月二日         | 高知新聞に「土佐歴史手帖」連載開始<br>(毎週月曜日) |
| 九月二四日        | 企画展 「歴史と美術 土佐名品展」開幕          |
| 一〇月一日<br>～六日 | 四国女子大学博物館実習                  |
| 一〇月二〇日       | 企画展 「歴史と美術 土佐名品展」閉幕          |
| 一二月一日        | 企画展 「近世 土佐文人画展」開幕            |
| 一二月二六日       | 入館者五万人達成。                    |
| 一二月三日        | 歴史民俗資料館運営審議会開催               |

## 〈お知らせ〉

現在、歴史民俗資料館友の会（仮称）の設立準備を進めております。友の会設立により、館の情報提供の輪を広げ、館の活動の活性化をはかりたいと思っております。同会発足の節には、是非御参加下さい。

## ユア・ボイス

「資料館へ四十五分ぐらい歩いていて、へとへとだったけど、中に入るといろいろあって見とれてしまい、つかれがふっとびました。」（国府小四年）  
 ・・・秋の遠足シーズンには、多くの小・中学校の団体入館がありました。歴史公園の方も、弁当を開く子どもたちで賑わいました。

「とても分かりやすく教えてくれて、うれしかったです。」「ありがとうございます。山ほどわかりました。」（国府小四年）  
 ・・・先生方に授業の内容にあわせて、クラス単位でのご利用もしていただいています。テーマを設けて事前学習の上、ご来館いただくと、子どもたちの瞳の輝きが違います。

「茅葺に 音を沈ませ 秋の雨」（弥生会・民家にて、俳句）

「郷土を学習する際、とても貴重な資料が数多く展示されており、子ども達は大変感激しておりました。」（横浜小教諭）

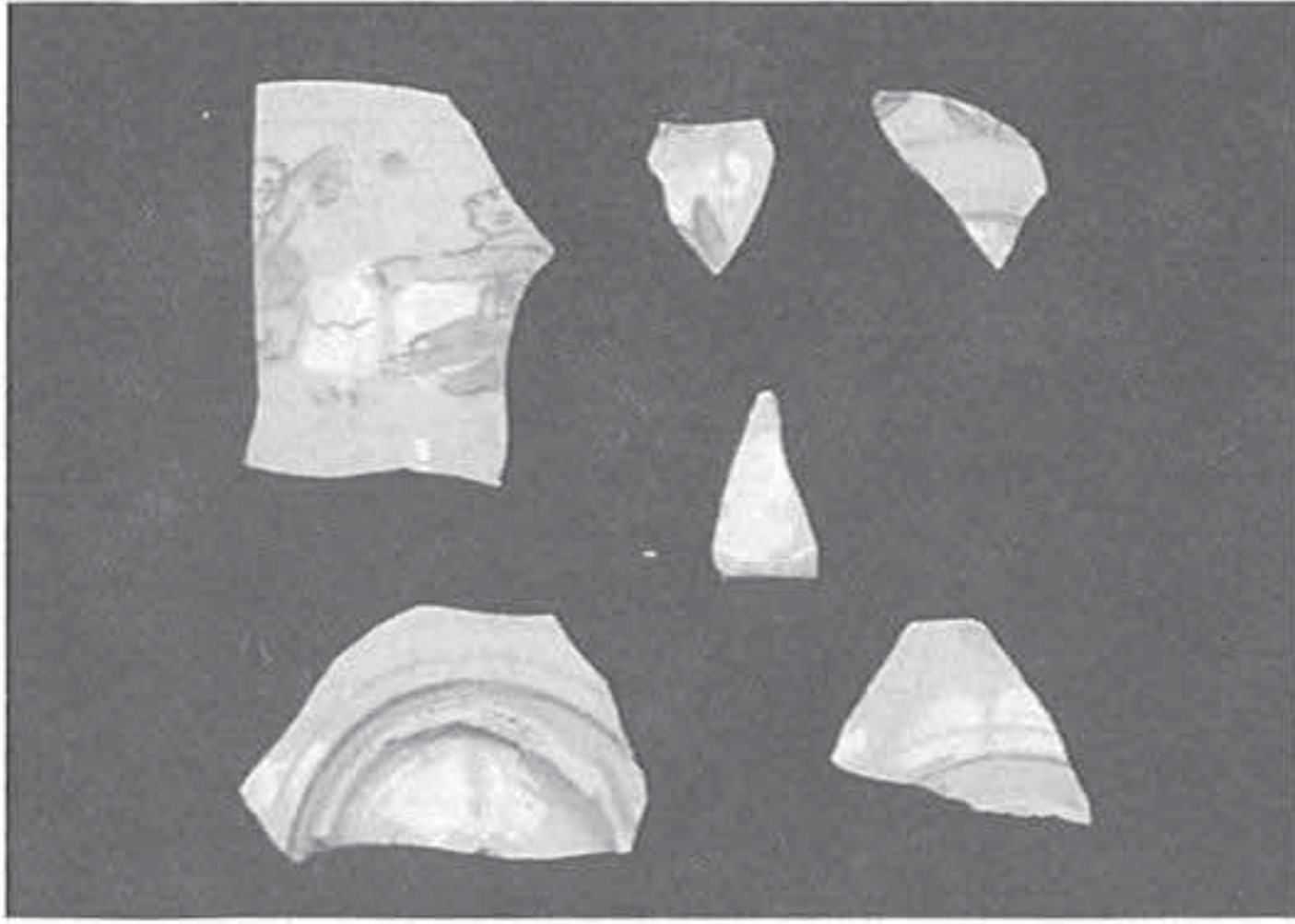
「今僕の住んでいる高知県には、こんな深い深い歴史があることが分かりました。」（高知大学付属小六年）

・・・こうした声を励みに、館員一同、資料館活動に取り組んでまいります。

## 〔企画展の案内〕

**土佐を掘る——第二回発掘された遺跡展**——平成四年一月一八日(日)より三月一五日(日)まで一階企画展示室にて開催します。

一九八九・一九九〇年度に発掘調査された十和村十川駄場崎遺跡、本山町松ノ木遺跡、土佐山田町ヒビノキサウジ遺跡、大方町早咲遺跡、野市町大谷古墳、南国市土佐国府跡・比江廃寺跡・土佐国分僧寺跡、中村市具同中山遺跡群、春野町芳原城跡、南国市岡豊城跡などから出土した遺物を展示します。入館料は、一般四〇〇円、中学生二五〇円、小学生五〇円(常設展観覧料金込み)



春野町芳原城跡出土 赤絵

## 〈記念講演〉

今回は、企画展「土佐を掘る——第一回発掘された遺跡展——」の期間中に各遺跡発掘調査の成果についての講演と特別講演を三回、二階A Vホールで行います。

### 〈講演〉

第一回

平成四年一月一八日(土曜日)  
午後二時～四時まで

「十川駄場崎遺跡」  
高知県文化財団 埋蔵文化財セン  
ター調査第二係長 森田 尚宏氏  
「西分増井遺跡」  
高知県教育委員会文化振興課主幹 出原 恵三氏

### 〈講演〉

第二回

平成四年二月一五日(土曜日)  
午後二時～四時まで

「土佐国府跡と寺院跡」  
高知県文化財団 埋蔵文化財セン  
ター主任調査員 廣田 佳久氏  
「中世の山城——岡豊城跡・芳原城跡——」  
高知県文化財団 埋蔵文化財セン  
ター調査員 松田 直則氏  
「具同中山遺跡群」  
高知県文化財団 埋蔵文化財セン  
ター調査員 前田 光雄氏

### 〈特別講演〉

平成四年二月二九日(土曜日)

午後二時～四時まで  
「宗教考古学が語る平安時代の土佐」  
高松短期大学教授 岡本 健児氏

## 〈利用案内〉

**開館時間** 午前9時～午後5時  
(入館は、午後4時30分まで)  
**休館日** 毎週月曜日(祝日及び振替休日にあたる場合は火曜日)／12月28日～1月4日

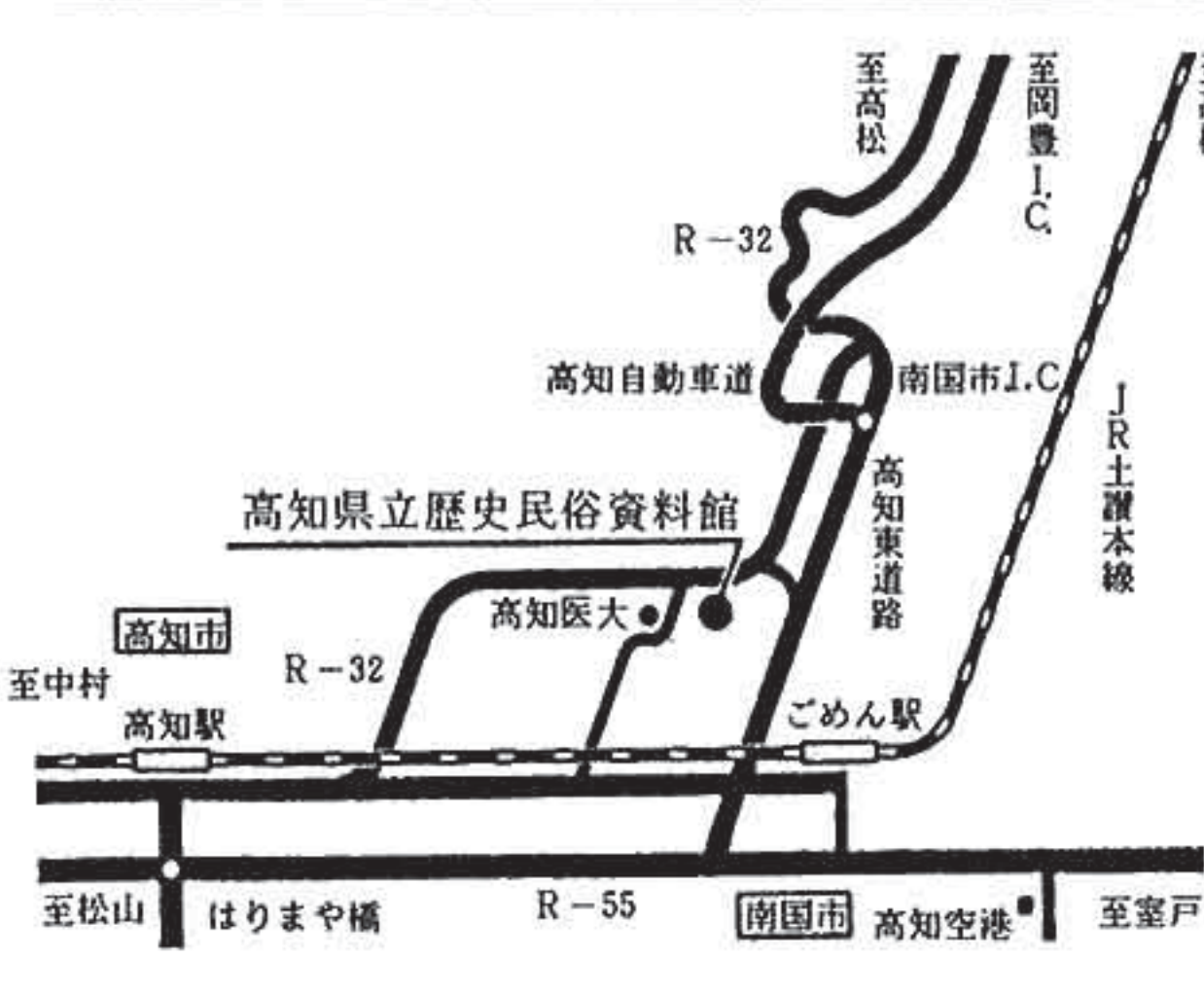
**入館料** 一般・400円／中学生・150円／小学生・50円  
〔常設展示〕生・50円

団体(20人以上) 割引あり  
(療育手帳・身体障害者へ1・2級)  
手帳所持者とその介護者(1名)長寿手帳所持者は無料)

### 交通機関

高知市中心部から車で約20分。  
駐車場(大型バス4台・普通車50台)あり。  
バスを利用する場合は次のとおり。

〔県交通〕 船岡南団地発歴史館行き終点下車。  
領石・奈路・田井方面行き学校分校(歴史館前)下車。  
(徒歩5～10分で資料館へ)  
〔土電〕 新改・白木谷方面行き岡豊橋下車。  
(徒歩10～15分で資料館へ)



## 〈記念講演〉について

上記の企画展関連講演は、入場無料で定員は八〇名です。  
参加希望の方は、各講座開催の一週間前迄に希望日を記入の上、葉書にてお申し込み下さい。

### 〈ひとこと〉

歴史民俗資料館では、絵画関係の企画展が続いておりましたが、今度は考古関係の展示を行います。現在、その準備作業に大わらわです。来春も是非当館にお立ち寄り下さい。(岡本)

まつりと芸能の取材調査で、県内各地におじゃましています。協力して頂いた皆さん、どうも有難うございました。(梅野)

今年度は仁井田の船大工さんのもとに半年通い、和船の建造工程をみせて頂きました。何年か後の企画展で御紹介できるように調査を重ねたいと思っています。(河野)

平成三年十二月一日  
編集・発行 高知県立歴史民俗資料館

〒783 南国市岡豊町八幡1099-1  
TEL 0888-6212211  
FAX 0888-6212110